



査閲時の中38回生の分
列行進(上)と、中39
回生の射撃の動作(左)。
(中38回・中39回『卒
業アルバム』より転載)

土浦中学の学校教練 4 ～査閲～

査閲(さえつ)とは、軍事教練の成績を実地に調べ、査定することで、学校教練に対しては、年に1度、陸軍大臣の任命した教練査閲官による査閲が義務づけられていました。戦時体制下においては、その評価が生徒の陸軍士官学校や海軍三校(海軍兵学校・海軍機関学校・海軍経理学校)等の軍学校のみならず、上級学校への進学を左右するほどの影響力を持つようになりました。文中の【 】内は筆者による注記です。

査閲

1925(大正14)年4月11日に公布された陸軍現役将校学校配属令(勅令第135号)(注)によって、中等学校以上の男子生徒・学生の教練を担当するために、陸軍現役将校(原則として大尉以上、大佐まで)が配属され、以後、教練は毎週2時間の必修科目となりました。教練の内容は、各個教練・部隊教練・射撃・指揮法・陣中勤務・手旗信号・距離測量・測図学・軍事講話・戦史等で、教材の配当には学校の程度に応じて差異がありました。学校教練に対しては、陸軍大臣の任命した教練査閲官による査閲が義務づけられていました。

査閲は、軍事教練の成果を査定されるのを目的に、軍から派遣された査閲官の前で繰り広げられました。学校では年間で最も大きな行事で、予行演習や校舎内外の大掃除等も行つて、緊張してその日を迎えました。

土浦中学でも水戸歩兵第二聯隊の聯隊長(不在の場合はその代理者)を査閲官に迎えて、毎年11月乃至12月に行われていました。1940(昭和15)年の査閲の際の分列行進の模様を5年生の中野正(中40回)が『進修第44号(1941年3月1日発行)』に『閱兵分列』と題して寄稿しています。

「待ちに待たれた十一月五日、今日こそ榮ある皇紀二千六百年【1940年、神武天皇即位の年を紀元元年とする日本独自の考え方】の本教練査閲である。早くも午前七時四十分全校生徒八百名は査閲官を迎へる爲校門に整列し、今か今かと待つてゐる。今日といふ今日こそ去年に勝る優秀の結果を獲得せんものと意気込み、誰の顔にも一入緊張の色を見せ、水を打

つた様に静寂そのものであった。

やがて音も無く走り來つた自動車から下り立つた堂々たる體格の中佐殿が我々の目前に姿を現した。此の中佐殿こそ忘れもしない去年の査閲官大森中佐その人であつたのだ。此の人に依つて本校の査閲が優秀ともなり、或ひは良好ともなるのだと思ふと、益々心のひきしまるのを感じずには居られない。

中隊長の號令一下我等の目は一齊に注がれた。さすが査閲官だけあつて眼鏡の奥底に光る炯々たる眼光が我々の目を射、我々の頭から足の爪先迄ぢりぢりりと睨みつける。その眼でじつと睨まれたら猫の前の鼠の様に立ちすくんでしまふ。がちゃんがちゃんと指揮刀と長靴の音を立てながら査閲官は一先づ玄關の方へ。

一方全校生徒は直ちに歩調も正しく駈歩にて運動場へ向つた。五年生だけは【学校前の】濱街道を通つて裏門【現正門の付近にありました】から入り、銃器庫前に集合して凜々しい武裝に掛つた。常には大聲で話し合つてゐる連中も今日は自重してか誰一人話する者も無く全く静かだ。何時もこんな風だつたらどんなに良いかと思ひながら運動場へ向ひ、閱兵分列の體形を整へる。

何時もより早い今朝の運動場は、しつとりと濕り、昨夜降りて未だ乾ききれない芝生に宿る夜露の玉が我々の靴を濡し、秋晴の空には赤とんぼが低く飛び交ひ、それと間違ふかと思はれる様に、數臺の飛行機【霞ヶ浦海軍航空隊の九三式中間練習機(通称「赤トンボ」と思われます)】が青空高く飛んでゐて宙返りをやる度に、全校生徒の視線はさつと飛行機に注がれる。恰も秋の野に今將に空陸相呼應して

大觀兵式が展開されんとする様な觀を呈してゐる。

寫眞屋も新體制か今日に限つてゲートルを付け、寫眞器兩手に走り廻つて寫すべき良い光景を探してゐるがこれを見ると一寸興ざめする様に感じられる。

長時間皆思ひ思ひに話合つてゐたその時『氣を付け』の號令が下つて、再びもとの静けさに返つた。みよ。遙か前方プール附近に警視總監の様な恰好をした【宗光李太郎】校長先生、松原【信雄】先生、續いて査閲官、高塚【半衛】先生皆悠々と歩いて來ること暫時。不動の姿勢をした我々の筋肉は益々ひきしまつて來る。先生全部がゲートルをつけてゐるのを見て査閲官はさぞ頼もしく思つたことであらう。

國運の隆盛衰滅を知らんと欲すれば、その國の青少年を見よと云はれてゐる様に國家の安危は我々の雙肩に繋つて居り、肇國以來の大精神大事業を受け継ぎ、更に發展せしむべき國家の運命を擔つた我々にとつては教練は重大なるものと思はなければならぬ。これを思ふと我々は血沸き、肉躍り、眼の光は一種異様に輝き咳一つする者さへ無い。

間もなく閱兵、注目は査閲官ではなく、校長先生にするのである。これは間違ひ易いことで、査閲官は飽く迄査閲官で、我々の行動を監視するのが目的である。先づ五年一同校長先生に視線を向けて目迎目送、出來る限り首を廻して注目する。査閲官は列兵間迄歩いて、服裝殊にゲートルの巻き方等細かい點迄注意して見る様である。朝周到なる注意を拂つてゲートルを巻いてきた者は今更そんな點に氣を配る必要はない。此の分なら優秀は確

實だと思ひながら然も今年は學校教練の目的が従來通りの心身鍛錬ではなくて、學徒に軍事的基礎訓練を施し、至誠盡忠の精神培養を根本とするにありといふ事に變つて、一旦緩急ある場合、直ちに戰場に於て戦闘能力を發揮することが出来る様に要求されてゐるが爲、優秀といふ成績は未だ一校も獲得してゐない。

此の優秀といふ二字を本校が頂戴することは非常に困難な事であるから誰の顔にも不安の色は漂つてゐた。

閱兵終るや再び査閱官は微動だもしない列兵間を縫つて歩いて綿密な検査だ。用意をささ怠りない我々は少しの缺點もないといふ自惚を持つてゐた。然し二三の缺點を見つけたらしく直ちに講評。聲は飛行機の爆音と風向の爲に殆んど聞えず良いか悪いか判断に苦しむ。『分列に前へ進め』中隊長の號令か、るや最初の第一歩を強く踏みしめ、大地も裂けよとばかり歩いた。鋭い劍先は日光にきらきらと輝き、こゝに歩武堂々分列行進が展開され、一糸亂れず勇往邁進、以て優秀の美を成さんことに努めた。

無我の境地になりかけんとした刹那、中隊長の白刃きらりと光り、眼は機械的に臺の上の校長先生の方へ向けられた。馴れない手付きで擧手の禮をなされた校長先生の顔にも眞劍の色が浮んで居た。

歩訓「歩調」の誤植と思われますは益々速くなり、加速度的に増加するが、これは『頭右』の間だけで再びもとの歩調に變る。手を肩の高さ迄振る者もあるので歩調は不思議に揃ふ。一直線上に視點を置きつゝ、行進し、丁度よい時機をみて『直れ』の號令。次に左に向きを變へる爲劍鞘を握つて駈歩にて新線につき、三度左

に方向を變へて初めて停止。四年三年二年一年と相當の成績を修めて全校生徒並立縦隊の儘西向きに集合し立派な講評を受けて喜び勇んで退場した。査閱官の喜びも亦如何ばかりであらう。」

翌1941年の査閱は、雨の中で行われました。5年生の戦闘教練は、水溜まりや泥の中に伏して、実戦さながら、後輩たちに畏敬の念さえ起こさせるものでした。

初めての査閱を受ける1年生が運動場に整列した時には、靴の中に水が入り、雨は強く顔にぶつかり目を開けていられないほどでした。金澤信安教官の指揮で行進、廻れ右、また行進、次いで速足行進。

助教の号令で行進し、一步一步踏みしめて行くうちに「廻れ右、前進」の号令、向きを変えて行進し元の位置に戻る。泥を跳ね散らかしての行進も終わり、査閱官から講評を受け、査閱終了。下着にまで雨が通つていました。

アジア太平洋戦争が、この年12月8日の真珠湾攻撃が始まると、教練も厳しさを増していきましました。『進修第46号（1943年2月15日発行）』の「査閱」（4年山口又新・中43回）には、1942年の銃剣による刺突訓練の様子が綴られています。

『第四學年乙組、假標刺突を行ひます』

沼尻【正男】教官殿の凜然たる報告。我等一同、短期間とはいひ、鍛へに鍛へた腕を奮ひ、猛烈果敢に實施せん、と誓ひ合ふ。前に立つ假標を米英の兵と思つて倒さずんばやまざる氣魄をもつて號令を待つ。第一列五名『伏せ』の姿勢をとる。

『突撃に』かすれぎみの教官殿の號令に、すばやく左足をまげ、右膝の下に折込む。『進め』うんと力をこめ、姿勢を起

しながら、假標に向つて突進する。『腕を張れ』『劍先が下る』ぴちりぴちり、助手の注意がとぶ。『突込め』劍を取りなほすと同時に目を見開き、くわつと口をあげ、腹の底から喊聲をあげる。『わあつ』氣劍體一丸となつて飛込む。『だあ』『よし成功』傍から機を失せざる助手の聲。必殺の劍は第一假標を見事につきとほす。直ちに姿勢をなほすと、第二の假標に突進

『えい』『よし成功』第二敵完全刺突。第三の敵『だあ』もう一回腰がひける。よし今度こそ『えい』これでもか。『よし成功』第一、第二、第三の敵を倒し、第一陣地突破成功。なほも敵追撃。或は腕を體につけないで、或は『押突き』になつて何回もやりなほしをされる者もある。皆、猛烈果敢必殺の劍を振ふ。『はげしかつたなあ』果して『猛烈果敢と熱心さを認める』との講評を受けることができた。

しかし細部に於てはまだ不十分な點が多。益々訓練を怠らずもつて國家非常の際にお役にた、ねばならない。」

1・2年生は徒手教練で、3年になつて初めて銃・劍を持ちました。4・5年になると広い校庭で東西兩軍に分かれて攻め合い、校庭の中央で突撃し合つて終了する教練も行われました。終了後に査閱官から「講評」がありました。『本日、教練は、概ね良好なり。』というのが決まり文句でした。この講評を聞いて、校長先生をはじめ先生方、何より配属將校が安堵しました。

この査閱は學校教練の総仕上げとも言ふべきもので、その結果はその學校全体の進学に大きな影響を及ぼしました。所定の単位を修得すれば、卒業式で卒業証書は授与されますが、その時に頂けると

は限らないものに教練檢定合格証明書がありました。『右ハ昭和〇〇年三月〇〇日當校卒業ノ際教練ノ檢定ニ合格シタルコトヲ證ス』。発行者はその時の配属將校（教練教官）で、校長ではありませんでした。優等賞等というものは、貰つても貰わなくても、その後の一生に特に支障はありませんが、この一通の証明書を貰えないと、教練檢定不合格の朱印が内申書に押され、軍學校へは勿論、上級學校進学は事実上不可能でした。兵役に就いても、1927（昭和2）年の兵役法制定後は、軍の幹部候補生となるための資格として、配属將校の行う教練を修了し、その檢定に合格することが必須とされ、不合格者は幹部候補生にはなれず、兵卒に甘んじなければなりませんでした。

なお、土中最後の査閱は、1944（昭和19）年11月18日（土）に実施されました。各工場に学徒動員中であつた4・5年生の作業状況の査察が午前中に、學校での3年生以下の査閱は午後に行われました。

（注）勅令第三百三十五号 陸軍現役將校學校配属令

第一条 官立又ハ公立ノ師範學校、中學校、實業學校、高等學校、大學予科、專門學校、高等師範學校、臨時教員養成所、實業學校教員養成所又ハ実業補習學校教員養成所ニ於ケル男生徒ノ教練ヲ掌ラシムル為陸軍現役將校ヲ當該學校ニ配属ス但シ戰時事變ノ際其ノ他已ムヲ得サル場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラス

前項ノ規定ニ依ル將校ノ配属ハ陸軍大臣文部大臣ト協議シテ之ヲ行フ

配属將校ハ教練ニ関シテハ當該學校長ノ指揮監督ヲ承ク

第四条 陸軍大臣ハ現役將校ヲシテ本令ニ依リテ將校ヲ配属シタル學校ニ於ケル教練實施ノ狀況ヲ査閲セシムルコトヲ得

（高21回 松井泰寿）

